2023 年度　学校推薦型選抜・特別選抜（社会人・帰国子女）・第 3 年次編入学試験　小論文
出題の意図と解答の傾向

問題１

【出題の意図】

蟹江憲史氏『ＳＤＧｓ（持続可能な開発目標）』（中公新書、2020 年）から、ＳＤＧｓを巡る個別合理性と社会合理性の関係性を議論した部分を引用して、ＳＤＧｓに対する考えについて問いかけた。

設問１は、筆者が「ＳＤＧハウス」づくりを通じて行動を起こすことで、いろいろな発見があることが、なぜ非常に重要なことのように思えたのかを、本文の主張に即して、字数制限の中で的確かつ簡潔に表現する力が試されている。

設問２は、筆者が述べている「個別合理性と社会的合理性の調和」を踏まえて、ＳＤＧｓに対する考えについて、具体的かつ理論的に表現する思考力や文章力があるかが問われている。

【解答の傾向】

＜設問１＞

課題文を要約すればよく、概ね、解答は良好であったが、「自分ごと」のみに言及し、経済的持続性が環境の持続性を確保する重要な要素であることに触れていないものが散見された。

また、「なぜ」と問われているにもかかわらず、本文の主張を説明しただけ、若しくは自分の考えだけを盛り込んだ答案が散見された。

＜設問２＞

概ね、解答は良好であった。地球温暖化問題に関連するレジ袋の有料化など脱炭素の取り組みやＥＳＧ投資に言及した解答が多く見られた。その他、ＳＤＧｓの 17 の目標のうち、貧困、飢餓などの具体的な目標について、フェアトレードやフードロス対策の重要性を指摘する解答もあった。

筆者が述べている「個別合理性と社会的合理性の調和を踏まえて」考えを書くべきだが、そもそも筆者の考えを踏まえずに意見だけを述べている答案がみられた。

また、ＳＤＧｓの体験談のみの答案や、問題文の「ＳＤＧハウス」を具体例としてあげた答案があった。

【その他】

〇漢字ミス：誤字があると、採点者の心証はよくないので注意されたい。

〇「要件」・「用件」や「追求」・「追及」・「追究」などの使い分けができていない答案が散見された。

〇表記方法：主語述語のねじれや、不適切な接続語の使用が散見された。一文を長すぎないようにすることや、適切な接続詞・改行を心がけて、読みやすい答案の作成を心がけてもらい

たい。特に、逆接の接続語を使用する際は注意してもらいたい。

です・ます → である	と思う → と考えられる
とても・すごく → 非常に	なので → だから

問題２

【出題の意図】

「日本人の国民性調査」に関する資料から出題した。この調査は文部科学省所管の統計数理研究所が行っている統計調査の一つで、日本人のものの見方や考え方とその変化を社会調査によってとらえようとしたものである。調査が始まったのは戦後間もない 1953 年で、その後 5 年ごとに調査が繰り返されており、2018 年には第 14 次調査が行われた。このような調査があるということを知ってもらうとともに、経済学部の受験生として、日ごろから経済やそれに関連する社会問題について興味・関心を抱き、日本経済について学習をしているかを見る問題であった。

＜設問１＞

【解答のポイント】

図１の日本の「経済力」・日本の「生活水準」の項目で、日本経済への評価は近年で持ち直し傾向を見せ、それを維持している様子がうかがわれる。これらと連関するかのように、図３の「社会に満足か」についても、2013 年で顕著になった「不満」の低下が、2018 年も堅調に維持されたようである。

図２の「あなたの生活水準は，この 10 年間でどう変りましたか？」と尋ねた場合、1993 年以前の結果には戻らないものの、近年は「わるくなる」方向の回答は減少傾向にあり、「変らない」が伸びる傾向にある。

バブル崩壊後の平成期の 30 年（1993～2018 年）ほどの動きを見ると、この間の最も劇的な変化は 1993 年～1998 年にかけて日本人が社会全般に対する自信を失い、自己評価を大きく下げたことであった。この点は特に経済面の評価にも顕著であったが、近年でこの自信喪失から回復の兆しが見られる。

【解答の傾向】

グラフの読み取り問題であるが、単にグラフの上がり下がりの指摘を行っただけの答案が多くを占めた。この設問では、「日本の社会経済情勢を踏まえて」なぜそのようなグラフの動きとなったのか、その理由や背景を問うている。

図１の日本の「経済力」は、「非常によい」が 1988 年から 1998 年に急落し、逆に「ややわる

い」が急増してそれが多くを占めているのは、「バブル経済の崩壊」があって「平成大不況」となり、「金融危機」を挟んで、かなり長引いたことが影響している。しかし、「ややよい」が 2013 年以降、やや持ち直していることもグラフから読み取って欲しかった。

一方の図２の「生活水準 10 年の変化」は「変らない」が多くを占めている。これは、バブル崩壊後はデフレ（物価水準が継続的に下がり続けること）となり、（名目）賃金がほとんど変わらなかったことが影響している。従って多くの人にとって生活水準はほとんど変わらなかったわけであるが、図３における「社会に満足か」の問いに対しては、「やや不満」が多くを占めている。これは賃金が上がらないのに、消費税や社会保障費の負担などが増大していることが関係しているといえよう。

受験生の答案では、「バブル崩壊」や「リーマンショック」などの経済用語は多少見られ、グラフの動きを説明している答案もあったが、ごく少数にとどまった。経済学部を受験するわけであるから、日ごろから経済について興味・関心を抱き、日本経済について勉強をして欲しかった。

なお、物価高やコロナの指摘が数多く見られたが、データは 2018 年までであり、最近のインフレやコロナとはまったく関係がない。いつのデータであるかをよく確認をして欲しい。

＜設問２＞

【解答のポイント】

図４の「もう一度生まれかわるとしたら，あなたは男と女の，どちらに生まれてきたいと思いますか？」の項目で、男性回答者は 1958 年以降、一貫して「男に生まれかわりたい」という回答が大多数を占めるが、女性は当初は男性に生まれ変わりたいが多かったものの、女性に生まれ変わりたいという回答が一転して伸びてきている。このことは、図５の「男女でどちらの方が楽しみが多いと思いますか？」という質問で、男女とも自分の側の性の楽しみが多いと答えるが、女性は近年「女性の方が楽しみが多い」と答える回答が増加傾向を示している点とも、女性が自分の性をより肯定的に捉える傾向という点で共通している。

しかし、図６の「今の日本では，ひとくちでいうと，男と女ではどちらの方が苦労が多いと思いますか？」と聞くと、男性の回答者も女性の回答者も「苦労は女が多い」という回答が増加傾向で、減少傾向である「男が多い」という回答を逆転している。男女雇用機会均等法の成立などにより、女性の社会進出が進むにつれて、日本社会は女性がより「楽しめる」社会になってきたと認識される一方で、なぜか苦労も多く、女性がまだまだ「生きにくい」側面を残しているのかも知れない。

【解答の傾向】

この問題は、女性の生活環境をめぐる意識の変化を問う問題である。時系列でみた場合、女性の回答において明らかな逆転現象（女性意識の変化）が起きている。図４では「生まれかわるとしたらどちらに生まれたいか」の質問に対して、1968 年以降は「女に生まれたい」が多数となり、図５において「どちらの方が楽しみが多いか」に対しても、1978 年以前と 1998 年以降では逆転が起きて、「女の方が楽しみが多い」となっている。そして図６においては「どちらの方が苦労が多いか」に対しては、男女ともに 2013 年を境に「女の方が苦労が多い」と逆転をしている。

設問１と同様、こうした逆転現象（女性意識の変化）が起きた理由や背景を尋ねている。「男女雇用機会均等法」や「男女共同参画社会基本法」などの法律によって女性の意識が大きく変わってきたことは事実であるが、それと同時に女性教育の高学歴化（４大卒の急増）などによって、女性の社会進出が目覚ましく急成長をしたこともあるだろう。さらなる経済成長のためには女性の潜在能力の活用が必要なわけである。

しかしそれによって、女性の楽しみも苦労も同時に増えたわけである。特に女性は今でも育児負担をかなり強いられており、それを少しでも軽減・緩和するために「保育所の増設」や「男性の育児休業制度」の充実が図られてきたが、制度の活用はまだこれからであろう。

受験生の答案では、こちらの狙い通りに書けていた答案が見られた。「男女雇用機会均等法」や「男女共同参画社会基本法」「保育所の増設」「男性の育児休業制度」などの用語は比較的多くの答案で見られ、これらに基づいて女性意識の変化を説明していた。

ただ逆にグラフの説明がほとんどなく、一方的に「男女平等社会」を主張している答案も同時に散見された。「図をもとにあなたの考えを述べなさい」と設問しているわけであるから、このような問題では、グラフの分析に基づいて考えを述べるようにすべきである。